

<金融史パネル>

江戸時代大坂の金融業ネットワークー大名の資金調達を素材に一

神戸大学 高槻泰郎

金融市場における資金調達の形態は、市場ベース（arm's length）の金融取引と、関係的融資とに大別でき、実際にはこれらを両極とする無数の組み合わせの中から選択される。我が国金融市場においては、後者の関係的融資が重要な位置を占めてきたと言われ、その一類型である戦後のメインバンクシステムについては豊富に研究が蓄積されている。

しかし、貸し手と借り手の間に存在する情報非対称がいかに緩和されたのか、協調融資を行った金融機関同士で、いかなる情報交換がなされたのか、といった点に肉薄する研究は、管見の限り存在しない。これらの極めて内部的な情報に、外部の研究者が接触することは不可能に近いからである。

このメカニズムを具体的に明らかにする手がかりが江戸時代の大坂金融市場に求められる。鴻池屋善右衛門（現・三菱東京 UFJ 銀行）や加島屋久右衛門（現・大同生命保険）などの豪商は、貸付先となる大名の大坂蔵屋敷に手代を派遣して財政上の意志決定に参画させ、大名の行動を監視しつつ、融資の可否を決定し、貸付額が自身の手余る場合には、他の両替商と協調融資を行っていた。まさに関係的融資を実現する金融業ネットワークが存在していたのであり、融資契約の事前・事後において行われた種々の交渉内容は、膨大な記録として今に伝わっている（大阪大学経済史・経営史資料室所蔵「鴻池善右衛門家文書」、神戸大学経済経営研究所所蔵「廣岡家文書（加島屋久右衛門家文書）」など）。

江戸時代において関係的融資慣行が成立した要因の一つには、幕府による債権保護が脆弱であったことが挙げられるが、司法による解決が期待できた戦後日本においても、関係的融資慣行が隆盛であったことを踏まえるならば、関係的融資慣行が持った経済的な意義について詳しく検討する必要があるだろう。これが本報告の掲げる第一の課題である。

第二の課題は、大名が関係的融資を受けることに加えて行っていた、市場ベースの資金調達について、その内容を明らかにすることである。具体的には、米切手という一定数量の米（10石）との交換を約束する証券を発行することで行う資金繰りについて、関係的融資との違いに留意しながら検討する。

大名の大坂蔵屋敷では、実際に保有する在庫米の量以上に米切手を発行することを常としており、この米切手が堂島米会所という江戸幕府管轄下の中央市場において、不特定多数の商人によって活発に売買されていた。関係的融資については、一切関与しない姿勢を見せた幕府であったが、米切手と米との兌換については、確実にそれが履行される様、法的な保護を加えていた。

幕府がこのような濃淡をつけた理由も含め、具体的な取引事例から米切手発行・取引市場の動態を明らかにしたい。